

平成 30 年 5 月 12 日現在

機関番号：32604  
研究種目：基盤研究(C) (一般)  
研究期間：2015～2017  
課題番号：15K03583  
研究課題名(和文)1960年代のG10とOECD/WP3

研究課題名(英文)G10 and OECD/WP3 in the 1960s

研究代表者

伊藤 正直 (ITO, Masanao)

大妻女子大学・その他部局・学長

研究者番号：70107499

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：国際金融システムの不安定は現在も継続している。その背景には、現在の国際金融制度の国際金融市場との不適合や国際政策協調の機能不全がある。こうした金融不全への対応として、IMF、FSB、G20、OECD、バーゼル委員会などの役割が検討されているが、これを明らかにするためには、それらの組織の起点まで戻る必要がある。本研究は、1960年代のG10、OECD/WP3、主要国政府国際金融部門の一次資料を新たに発掘することを通して、主要国間の政策対立、とくに米と欧州諸国やBISとの政策対立の存在を検出することができた。また、国際金融機関内部での内的な金融理論の形成も検出しえた。

研究成果の概要(英文)：The instability of the international financial system is still ongoing. The background to this is nonconformity with international financial markets of the current international financial system and dysfunction of international policy coordination. The roles of the IMF, FSB, G20, OECD, the Basel Committee, etc. are considered as measures to deal with such financial failure, but in order to clarify these roles, it is necessary to return to the starting point of those organizations. In this research, through new discoveries of financial policy materials made by G10, OECD / WP3, the major governments finance sector in the 1960s, policy conflicts among major countries, in particular between U.S.A. and European countries exist Could be detected. It was also able to detect the formation of external financial theory inside the international financial institution.

研究分野：経済学

キーワード：国際金融機関 国際金融市場 IMF OECD/WP3 BIS G10

## 1. 研究開始当初の背景

1970年代以降の金融危機対策において主要国の国際政策協調が大きな役割を果たしてきたことは、よく知られている。1970年代初頭の国際通貨危機の際には、G10、G10Dのなかで、アメリカとヨーロッパ諸国が激しく対立し、そのなかからIMFC20やG5が生まれてきたこと、1982年の中南米危機や1997年のアジア通貨危機に際しては、IMFや米財務省を中心にいわゆるワシントン・コンセンサスが形成されたこと、2008年のリーマンショックに際してはそれまでのG7に代わってG20やFSBが創出されたことなどが、それを象徴する出来事であった。そして、これらの政策や組織が果たした機能と役割については、IMFやその他の国際金融組織が発表してきたいくつかの報告書や論文、国際金融論や国際政治学の研究者の多くの論文によって、その内容はほぼ知られている。

しかし、こうした国際政策協調の前段階であり、前提となった1960年代のG10やOECD/WP3、BISの果たしてきた役割については、その内実は現在でもほとんど知られていない。筆者は、かつてこの時期のG10やWP3に対して、主として大蔵省の資料に基づいて簡単な検討を行ったことがある(『昭和財政史 昭和27-48年度 国際金融・対外関係事項編』11、12、18)。また、筆者を研究代表者とする科学研究費基盤研究(B)「戦後国際金融秩序の形成と各国経済」(2009～2011年度、研究課題番号：21330082)でも、IMFの内部資料を利用してこの点の解明を試みたことがある(伊藤正直・浅井良夫『戦後IMF史』名古屋大学出版会、2014年として刊行)。しかし、それらでの分析では、発掘しえた資料が断片的だったこともあって、1960年代のG10やWP3の役割を十分に明らかにすることは叶わなかった。

これらの研究を遂行する過程で、OECD/WP3の資料公開が最近ようやくはじまったことを知ることができた。BISでもOECDおよびG10の資料公開がはじまっている。また、日本銀行においてWP3に出席した日本銀行スタッフの資料が公開され始めた。さらに、米NAにおいてもG10関係資料の存在を確認することができた。これらの資料については、科学研究費基盤研究(B)「1970年代における国際通貨・金融システムとOECD」(研究代表者矢後和彦、筆者は研究分担者、2012年度～2015年度)において資料収集と分析を進め、一定の成果を得ることができた。また、この共同研究の成果については、いくつかの国際学会、国内学会の場において発表を行ってきた。ただし、この共同研究は、1970年代を主たる対象としていたため、本研究が対象とする1960年代は射程外に置かれた。本研究は、上述の共同研究では対象外とされ、現在ブラックボックスの状態にある1960年代の国際金融の領域における金融政策協調の実態を、G10やWP3という組織のありようを検討することを通じて解明しようとするものである。

## 2. 研究の目的

リーマンショック後の金融危機対策において、G20、FSB(Financial Stabilization Board)、パーゼル銀行監督委員会などが重要な役割を果たしている。1970年代初頭のニクソンショック時の国際通貨危機においても、G10、OECD/WP3が大きな役割を果たした。しかし、1960年代のブレトンウッズ期においてこれらの組織がどのような役割を果たし、どのように機能したのかについては、今日でも国際的にもほとんど明らかではない。本研究は、1960年代のG10、G10DおよびOECD/WP3の役割を、これら組織が残した未発掘の一次資料に基づいて解明し、1970年代および現在とどこで連続しどこで断絶しているのかを明らかにす

ることを目的としている。また、そこで日本が占めた位置や役割についても明らかにする。

### 3. 研究の方法

本研究の特色は、1960年代のG10、G10DおよびOECD/WP3の役割を、以上のようなOECD、BIS、米NAにおける新資料の公開という情勢に対応し、これら組織が残した未発掘の一次資料に基づいて解明し、国際金融を巡る政策協調のあり方が、1970年代および現在とどこで連続しどこで断絶しているのかを明らかにするところにある。

第1に、本研究は1960年代におけるG10、OECD/WP3の活動を分析する。具体的には、OECDに保有されているWP3関連の一次資料(議事録や会議提出資料)、同日銀保有資料、BISや米NA、フランス公文書館などに保有されているG10関係資料を収集・分析し、その組織の生成過程に遡行することで、1960年代の国際金融において何が問題となり、その解決のためにどのような国際協調が志向されたかを検討したい。1960年代のG10の活動、WP3の活動は、その内実がまったくといってよいほど知られておらず、本研究は国際的にも初めての試みとなると考えられる。

第2に、こうした組織に対して日本がどのように関与したかの解明を行う。日本は1964年IMF8条国移行、OECD加盟とともにG10およびWP3に参加する。しかしながら、1960年代においては、このいずれにおいても、日本はsilent seatを占めるにすぎなかったとされてきた。大蔵省資料でも、会議の場での日本の発言はほとんど記録に残っておらず、アメリカの主張にほぼ一貫して追随してきたと考えられてきた。しかし、BIS、Clement文書課長の日銀セミナーでの発表(2010年)で、日本がこれ

まで想定されてきた事態とは異なって、かなりの発言や提言を行っていることが示唆された。残念ながらクレメント氏の報告は論文となっていないが、この示唆を受けて、日本の国際金融政策協調における役割を発掘することをもうひとつの課題としたい。

### 4. 研究成果

上述のような研究目的と研究方法に従って、2015年度にはOECD本部文書室において、1960年代OEEC時代からのWP3関連資料(議事録や会議提出資料)およびオツラ・グループと呼ばれた高官の非公式会合の議事録資料を収集することができた。2016年度には、BISにおいて、1960年代におけるG10 Meeting、G10D meeting、同時期にOECD/EPCのトップであったMilton Gilbert文書、同じくBIS支配人であったGabriel Ferras文書、Rene Larne文書などを収集することができた。また、最終年度の2017年度には、ワシントンDCの米NAにおいて、国際金融関係のRG56文書の補足調査を行い、アメリカ側からのOECD/WP3、G10などへのコミットのありようを新たに把握することができた。さらに、オースチンのL.B.J.Libraryにおいて、1960年代後半の財務長官であったファウラー文書、財務次官補であったデミング文書などを収集し、ジョンソン政権の対外金融政策につき、新たな知見を得ることができた。

こうした新たな資料発掘の結果として、研究の当初目的であった1960年代における国際政策協調や先進国間の対抗の実態につき、アメリカとヨーロッパ諸国の対立の根拠、ヨーロッパ諸国内部における国際金融のワーキング・メカニズムについての認識の差異、国際機関や国際組織における国際金融領域での経済理論の理論的發展などを、従来にない密度で明らかにすることができた。また、1964年にG10に新たに参加した日本の、G10における行動についても、かつてのBIS

文書課長の主張の当否につき、一次資料に基づいて確認することができた。これらの正貨については、金融学会や経済史関係の国際会議など、内外の学会において発表することを予定している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

2017年度

伊藤正直・大貫摩里・森田泰子「1990年代における金融政策運営について」日本銀行、IMES 2018-J5、査読有、2018/03、1-91頁

伊藤正直「高橋財政をめぐる論点整理」日本金融学会『金融経済研究』40号、査読有、2018/01、66-70

伊藤正直「書評：齊藤壽彦『近代日本の金・外貨政策』」『地方金融史研究』第48号、査読無、2017/05、42-46頁

2015年度

M.Itoh, R.Koike, M.Shizume, 'Bank of Japan's Monetary Policy in the 1980s: A View Perceived from Archived and Other Materials' *Monetary and Economic Studies*, Vol.33, BoJ, 査読有, 2015/11, pp.97-200

伊藤正直、小池良司、鎮目雅人「1980年代における政策運営について」『金融研究』34巻2号、日本銀行、査読有、2015/04、67-160頁

〔学会発表〕(計3件)

2016年度

伊藤正直「泡沫経済の日中比較と金融システムの安定」天津理工大学国際シンポジウム、2017/03

伊藤正直「われわれは高橋是清から何を学ぶのか」日本金融学会全国大会、2016/10

伊藤正直「齋藤壽彦『近代日本の金・外貨政策』をめくって」日本金融学会歴史部会、2016/03

〔図書〕(計4件)

2017年度

財務省財務総合政策研究所財政史室編(伊藤正直・浅井良夫・桜井敬子)大蔵財務協会、『平成財政史 平成元～12年度 11

資料(4) 国際金融・対外関係事項 関税行政』2018/03、800頁

証券経済学会/日本証券経済研究所、きんざい、『証券事典』2017/06、1020頁(伊藤正直「日本の証券市場の歴史 3、335-350頁執筆」)

財務省財務総合政策研究所財政史室編(伊藤正直・浅井良夫・桜井敬子)白峰社、『平成財政史 平成元～12年度 7 国際金融・対外関係事項 関税行政』2017/03、545頁

2015年度

M.Itoh, K.Yago, Y.Asai, Eds. Springer "History of the IMF" 2015/05, pp.324

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤正直 (ITO MASANA O)  
大妻女子大学・その他部局・学長  
研究者番号：70107499